

2004.4.1 発行

2004-13

特集
大学
21世紀の知のシステム

対談

日本の大学は変わることができるか

グローバル化の中で考える大学の原点

生駒俊明＋橋爪大三郎

おまけ・「いい大学 先生で選ぶ理系文系100選」『AERA』第17巻5号通巻847号

P37 朝日新聞社 2004.2.2 発行

文系50人

研究者名

得点

橋爪大三郎

26.5

大学学部学科名

東京工業大学

センター試験 2次試験

82.2%(222点 270満点) 62.5%

ボーダー点/満点 難易度偏差値

キリスト教、仏教、イスラム教、儒教

コメント

などの論理構造と本質を解明。教育政策にも発言。著書：日本人は宗教と戦争をどう考えるか

『大学ランキング2004年版』(朝日新聞社)の「メディアへの発信度(総合)」を基に作成した。ただし、①理系、芸術系の研究者②学部生を担当しない大学院・研究所専任の研究者③大学以外への転出予定などがある研究者や故人などは除いた。点数は02年に①主要紙書評欄で著書が紹介された回数②各紙文化欄や雑誌に載った論文数③各種新書・選書の執筆冊数——などを、一定基準に従ってポイントに換算して算出した。研究者の正式所属は大学院の場合がある。表では、判明する限りで主に講義を受け持つ学部・学科を表示した。入試データについては、理系の表を参照。

おまけ・「2004年夏休みに贈るベスト経済書100冊」『週刊東洋経済』第5909号

p130,132,133 2004.8.14 発行

45位

『自由の平等』

立岩真也著

岩波書店/3,255円

(橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

72位

『よみがえれ、哲学』

竹田青嗣、西研著

NHKブックス/1,176円

(橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

テキストから遠く離れて／加藤典洋著／講談社／1890円
●推薦者(橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

25位

おまけ・「2004年経済・経営書ベスト100」『週刊東洋経済』第5931号 p125 2004.12.18 発行

81位

『人間的自由の条件—ヘーゲルとポストモダン思想—』

竹田青嗣著

講談社/2835円

(橋爪大三郎/東京工業大学教授(社会学))

大学の原点とは

橋爪 ものすごい勢いで今、大学が変わりつつあると感じています。私が理工系の大学に勤めているせいかわかりません。この十五年ほどのあいだ、中国を数十回ほど訪れてさまざまな大学を見るチャンスがありました。中国の大学も大変な勢いで変化している。アメリカの大学も、大きく変化しつつある。

まず、どの国も、理工系重視になつていっているんじゃないでしょうか。大変におカネをかけている。おカネがないと、理工系の人材が養成できない、世界でトップクラスの研究をすることが難しい。おカネをかけないと大学の社会的機能が果たせなくなっている。

もう一つ、国と国の垣根が大学でも低くなつてきて、学生が猛烈な勢いで移動し始めている。EUが一番顕著だと思いますが、コンソーシアム(大学連合)や単位の互換、分校など、いろいろなやり方で学生が移動し始めた。こうした動きはほんの前触れで、これからもっと激烈に移動し始めるのではない。教員も移動し始めている。今までは、国ごとに大学があるという感じで、日本はいまでもそうですが、それは過去の話になりつつある。

その背景として、社会と大学の関係がどこかで根本的に変化し始めているんじゃないかと思っています。ただ私は、理工系の人間ではないので、実際のところがいま一つわかり切らない。その辺を今日は、詳しくお教えいただけるのではないかと、楽しみにして来ました。こういう私の感情はずれているのでしょうか。それとも、まず当たっているのか。

しょうか。

生駒 初めから難しい問題が出てきましたが、国境がなくなつて流動化しているのは大学だけではないですよ。企業などの経済活動ははかり前から国境がなくなっている。それに比べれば大学はまだ遅れている。

しかしその前に、大学の本質を考えたとき、僕がいつも言っているのは、大学の存在の歴史は千年ある。国(政治体制)の寿命はもっと短い。あらゆる政治体制、思想を超えて大学は存在する。大学は非常に普遍的で、人の流動化が起こるといふのは、ある意味では、大学本来のあり方といえます。

ただ、現在では大学はいま言われたようにおカネがかかるし、しかも国がおカネを出して人材育成をして国力をつけようということがあります。アメリカは上手に世界中から初・中等教育の一番上澄みの優秀な学生をアメリカの大学にさらって、国力を強くした。

つまり、大学は本来、国を超えて存在してきたのに対して、現代では国というものが競争力強化みたいな目標を掲げて戦略的に大学を使っている。この傾向はアメリカやイギリスでは非常に顕著です。そういうフェーズが強く顕在化してきたのだと、僕は見ているんです。しかし日本政府は逆です。国の競争力強化のために高等教育を強化しようとしているとは思えない。

僕は一九八〇年くらいから大学改革にずっとコミットしてきたんですが、自分自身が大学にいたせいもあって、当初は、大学と社会の連携推進というささか本質と離れた

ところで大学を変えようと言ってきました。ところが今は、そういう傾向が強過ぎるので逆に大学の本質に戻ろうと、産学連携に水を差すようなことを言っています。例えば教授たちはキャンパスに帰れど、千年の歴史を通じて、あらゆる政治体制を超えて大学が存在してきた——その原点にもう一度立ち返ろうと。

橋爪 おっしゃるとおりで、そういう原点は、大学を考える場合に外せませんね。

大学というものをつくったのは、イスラム教徒が最初だと思ふんです。それを真似て、キリスト教徒がイタリアのボローニャ大学をつくったのが十二世紀と言われている。いずれも、宗教がバックボーンになつている。そして、イスラム教もキリスト教も、民族を超えた国際組織なので、大学はローカルな利害を離れて、人類共同体の知に貢献するのだという強い使命感でもっている。

ただ日本の場合、産業の振興が国家の重要目標であった時期に、国の主導で大学制度を取り入れたので、そういう普遍的な大学像は横に置かれて、帝国大学というかたちの大学をつくった。これに国民が慣らされてしまつているという点が、とても問題をややこしくしている。

日本にも近代国家ができあがる前に、仏教という宗教的な知の体系がありました。これは日本一国に収まるものではなく、中国やインドにまたがる国際的な知のシステムです。そういう国際標準に従ってテキストを読む慣行がいろんな寺院に伝承されていて、それが世俗にも関与していた。比叡山もそうです。江戸時代に儒教が入ってきて、

このシステムはずっと機能していたんです。仏教のことを考えれば、普遍的な知のシステムに触れていたという点で日本も例外ではない。

ところがそれと無関係に、ヨーロッパ起源のシステムが取り入れられた。その結果、国内では権威／外国では無名という、日本のための大学ができあがりました。日本国に役立つ人材を日本語で育成し、オールワンセットで国内にあらゆる学問を揃えたわけです。こういった性格は、中国などにも共通している。後発国はだいたい、国が大学をつくっているんです。

それが、企業が多国籍になり、世界市場が形成され、ポスト冷戦でグローバル化が進んでいく中で、大学も本来あるべき国際的な環境に置かれることになった。はじめて大学が、国を離れて自立しなければいけないんだということになった。やっと大学の本質にたち帰ることができた段階になったと思ふんですね。

生駒 おっしゃる通りに、日本の大学は、明治に国を興隆させるいわゆる「殖産興業」のために輸入したものだ。それから、大学の本質をわかつている人が非常に少ないんです。僕はある意味では古い考え方を抱いていて、大学というのはやはり学問をやることであり、学問と世俗とを分離させて考えるべきじゃないかと思っています。ボローニャ大学を見てもつくづく感じたんだけど、ヨーロッパでは学問が一般大衆にある一定の尊敬の念を持って受け入れられている。アメリカでは違った意味で学問が大衆レベルでも尊重されている。しかし日本では学問が一般社会に認知されていま

せんね。今まさに言われたように、大学は国に従属するものだという考え方が広まっている中で、今の大学改革の進行を見ると、どうも大学が本質から違うほうへずっと動いている感じがしています。

そこには、大学の大衆化という問題があると思います。大衆化のために、大学の本質が忘れ去られてしまい、「学問」というのは人間の本質に関わる営みである」という考え方が希薄なんですね。そこに僕は危惧の念を抱いているわけです。

最近僕は、「アカデミック・フリーダム」という今では死語となった言葉をわざわざ使っているんだけど、この言葉がイデオロギー闘争の時代には「大学の自治」というふうに訳されてしまった。「アカデミック・フリーダム」は「大学の自治」という誤った方程式を作り、その根幹を、憲法が保証する「学問の自由」に帰趨させるという日本的な誤った図式が定着してしまったところに大きな問題がある。「アカデミック・フリーダム」の概念は日本国憲法以前にあったものです。僕流に再定義したアカデミック・フリーダムというのは次のようなものです。すなわち社会はその歴史的な経緯から大学に学問研究に基づいた将来価値の創造を託すことは社会の健全な発展に不可欠であると認識したために大学に時の権力から解き放たれた自由を与える、これがアカデミック・フリーダムである。

そうやって考えたとき、学問の創造と伝承のほかに、応用までを加えて大学の本質と規定するのか、それとも学問の創造と伝承でとめておいて、応用は大学の本質から切

学説を統一し、教会の秩序を保つという応用的な側面がかなりある。

そうすると、残る哲学が、いまお話にあった、純粹真理探究的な性質の知だと思いますが、哲学はおカネがかからない。知識人が本を読んでもいればよかったと思うんです。ところが産業革命以降、この哲学にも、物理学を大砲の弾道計算に使うとか、いろいろ応用可能性があることがわかって、それで研究開発が大事になり、工学部などもできるようになった。

そうすると、哲学の哲学たるゆえんは、知識のための知識、純粹な知識ということなんです。純粹であることによつて基礎理論が進むと、百年くらいして応用可能性が見つかったりする。そこで、どんなに純粹な哲学でも、何か応用できるんじゃないかとみんな思うわけですね。こういうふうコンテキストが変わってきた。

生駒 もちろん、本質的な学問が応用に役立たないと言っているわけじゃないんです。学問は確かに、実生活に非常に大きな影響を与える。ただ日本の場合、そもそも殖産興業のために学問が取り入れられたから、新しい学問を創造した経験がない。そういう面から大学の本質を議論するときに、ややもするとまさにあなたが言われたように、工学系、科学技術の知識の応用による経済的な発展という面ばかりに重きが置かれすぎる面がある。結果としてそうなることはいいし、大学でそれをやることもいいと思います。だけど、本質はどの辺にあるかということを考えて、大学は非常に歪められた存在になってし

り離すかというのは、一つのポイントだと思います。

現実には、すでに応用や社会貢献が入っていますけど、もう一回、その点をよく洗い直す必要がある。アカデミック・フリーダムと言われるものがなぜ賦与されているか、そういうことが大学の本質を解き明かす一つの鍵になると思うんですね。

この問題は、僕なりに長年考えていて、先ほど言ったように将来価値の創造のために、大学はアカデミック・フリーダムを社会から与えられている。研究の面でも教育の面でもそうですが、学問を通じて、現在価値に左右されずに新しい価値を創造すること。それが大学の本質だと思っ

ているわけです。それで僕は「社会契約説」と勝手に名付けて、大学と社会はある契約の下に自由が保証されているし、財政的な援助も受けられる。ただ、日本の六百数十ある大学全部にそれを保証する必要はない。今ある大学の大衆化に対して、大学の本質をどうやって訴えていくかというのはすごく大きな問題なのに、このことを指摘する人はあまりいないんですよ。

橋爪 それは大事な問題だと思います。

ただ、そういう本質的な部分が、まったく応用と切り離されていたのかどうか。ヨーロッパの大学を例に挙げれば、中世には四つの学位がありました。神学、医学、法学、哲学です。医学と法学は、学問とか真理の追究とか言うより、はじめから職業的なギルドの考え方にもとづいている。神学は、もう少し知的関心に応えるものかもしれないが、

まう。

さらに、大学が普通の行政組織と同列に論じられているものなのかどうか。西欧ではずっと大学は世の中から孤立して、非常に特殊な存在としてあった。長い歴史を通じて学問を生成した経験というものを、学問に携わらない一般大衆も体感として知っているわけです。だから学問に対するある種の畏敬、畏怖の念を持っているのに対して、日本はまだたくないものね。そういう大学像なしに、日本が大学改革を進めているということに大変危惧を抱いているんです。日本は大学が崩壊する最初の国になるんじゃないかと。

健全な市場原理が働いていない

橋爪 大学の根幹をなすものについて、私はこう思います。

以前、アメリカの教授と大学について話したとき、「大学とは人です」と言われたことが印象に残っているんです。建物とか設備とかいろいろあるけれども、大学とは要するにどういう教授がいるか、それに尽きるんだと。

生駒 そうだね。

橋爪 一人ひとりの教授が教育や研究に誇りを持っているか。自分の専門分野で、世界をリードしているか。欧米の一流大学は、そこからすべてが発するんですね。優秀な人間を大学に連れてくるために、学長はじめ経営陣はすごく努力しているし、その人がトップか二番目か十番目かということ、本人も周りの人も十分理解している。

トップクラスの人間が集まって活発に動いている大学が、一流の大学である。

そういうトップクラスであるかどうかということ、応用可能性とは、別次元の問題だと私は思うんです。トップを走っている、創造性にあふれている、新しいアイデアをつぎつぎに出す。そういうことが、私から見ると、大学の大学たるゆえンである。

ところが、そういう努力をしている大学は、応用可能性も高いんですね。

二流の大学というものとすると、それは、一流の人材を集めていないくせに一流のアイデアを借用して、応用可能性のある仕事をしようとする大学のことじゃないでしょうか。そういう意味では、日本の大学は残念ながら二流の大学です。中には一流の人材がいるんでしょうけれども、システムとして一流のスタッフが集まるようになっていない、というのが実感なんです。

生駒 大学は人であるというのは、そのとおりだと思います。ある人が教授なり助教授なりに選ばれたら、そこで自分の価値観に基づいた研究や教育ができる——そういう場を提供することが大学だ、というのが僕の特論なんです。ある臨界レベルを超えた能力を持ったフアカルティ・メンバーを終身雇用するテニニア制が欧米の大学にあるのはそのためです。アカデミック・フリーダムによって、個人が最大の能力を発揮できる環境を整えることが大学のマネジメントだと思うわけです。

だから理想的には、大学のアドミニストレーションや学

ます。その順位と授業料が関連している。トップ五〇の有力私立大学はだいたい年額三万ドル台で、寮費も含めると四万ドルにもなる。日本円にすると二年で四〇〇万円以上かかるわけです。四年間勉強したら、一二〇〇万円になる。もちろん、必ずしも全員が全額を払うのではないんですけど、そのくらい価値のある教育をしているというふうに見える。

ランクが下のほうの大学では授業料が半分くらいになって、年額一万七千ドルなどとなっている。大学と名前はついていないけれど、職業訓練校みたいなものもある。

つまりアメリカでは、大学について世間の評価が確立していて、大学の質がはっきり区別されているし、それに応じて値段もついている。大変明快だなと思うんです。日本にもランキングはありますが、値段の差はついていない。生駒 値段はむしろ逆ですよ。アメリカはいい大学ほど授業料が高いのに、日本は悪い大学ほど授業料が高くて、いい大学ほど安い。だから市場メカニズムが働きのようがない。その点は非常に面白くて、「大学に市場原理を」とみんなよく言っていて、僕もその一人なんだけれども、いわゆる普通の意味での市場原理にはなりやうがない。出来の悪い息子にお金持ちの両親が高い授業料を払ってでも、悪い大学でも大学出というライセンスが欲しいという状態だから。

橋爪 それは誰にとっても不幸なことだと思いますね。向こうのいい大学は、給与の高い教員を大勢集めて、しかも学生一人当たりの教員の人数が多い。それだけいい教育

長のリーダーシップは、小さければ小さいほどいい。ところが、現在進行中の大学改革はまったく逆行している。ただ、それに対して僕が反対を唱えないのは、過去の大学におかしな終身雇用制が根付いてしまったために、スリーピング・プロフェッサーとかブレイキング・プロフェッサーがたくさんできてしまった。そういう状況を是正するために、現在、学長のリーダーシップで組織改革をし、組織として何か動こうという方向を僕は容認しているわけです。だけど、その過渡期が終わったときには、大学の組織というのは、やはり個人の能力を最大限に発揮できる場を提供するようにすべきで、優秀なスタッフをどうやって選んでいくかというところに大学運営の重点を移さなければならぬと思います。

だから現在でも、大学が組織として、例えばある企業と包括協定を結んで研究をやるなんていうのはもつてのほかだと思っているわけです。大学の本質を見据えないで、東大とどこそこの企業が学長レヴェルと社長レヴェルで、この分野に対して先生をこれだけ使ってやりましょうなんていうのは大学のやることじゃない。たとえ産学連携の中でもね。だから今は過渡期として大学の経営能力というか、学長のリーダーシップを強くするのは認めるけれども、本質は決してそうではないんです。

橋爪 しかし果たして、日本で人を生かす大学システムをつくれるかどうか。

アメリカでは、大学のランキングや評価がたいへん普及していて、毎年、いろいろな雑誌が大学評価の特集を出し

をするから当然おカネがかかるという、健全な考え方ができている。

日本の場合、なぜそうならないかというと、受験があつて、学生定員の規制もあつて、評判の悪い大学までまんべんなく学生が回ってくるからです。そういうこともあつて私は、入試制度を廃止するという持論を前から言っているんです。いい大学をつくらうという切迫感がなければ、努力も何も始まらない。

それから、アメリカの大学の大衆化と日本の大学の大衆化とは、全然意味が違います。日本の場合だったら、教育も研究も本当にひどいま、大学の看板を掲げてずつとやっていける。そういう状況なので、国立大学の法人化は、批判はあるけれども、一歩前進なのじゃないかと思っています。

国立大学法人化の評価

生駒 法人化は、スタートは不純でした。公務員の定員削減とか、財政軽減とか、そんな理由で始まったことでしょう。ただ大学としては、今までの経過からみるとやむをえない処置という面もある。それに結果としては、これをいい方向に捉える可能性はすごく増えているわけだし。

その一つが、大学のミッションをクリアにして、大学はそれに向かつて注力していこうということで、これは私立大学もそうせざるをえなくなってくる。大学でも選択と集中、個性化ですね。国立大学が本当にそういうことに努力し始めたら、私立はやっていけないと思うんです。だか

ら日本全体に対しては、大きな変革を起こさざるうし、いい方向に向かつてほしい。

そのとき、効率の悪い研究・教育をやる大学を残すことがすごく大事で、国立はそういう役割を果たしてきた部分もあるわけです。すぐには役立たないようなことでも、コソコソと研究を続けてきた。そういう人たちが本来の意味での新しい学問をつくっていることを忘れてはいけない。ここが僕は法人化の最大の問題だと思っているわけです。そこを間違えると、日本全体として、本当の意味の大学がなくなってしまう可能性だってあるわけです。

だから僕は、大学法人化後の大学組織として、コアとシエルという二つの構造を提案しているんです。コアの部分は、アカデミック・フリーダムに守られて、個人の自由裁量で研究・教育をする。一方シエルの部分では、コアの成果を使って社会に貢献する。コアと社会の間を繋ぐ役割の組織。ここは大学の本質から外れても一向に構わない。就職活動、学生採用、入試、産学連携などもここに入れる。こうしたシエルとコアの構造をクリアに出した大学組織をつくる必要があると思います。

そのとき、コアの部分は、外から見てもだらない研究であつても、大学の中で守っていく。ただし、先生には説明責任がある。実生活に役に立たなくてもいいんだけど、いかなる知的営為なのかは説明しなければいけない。

橋爪 説明責任は、とても大事です。私の言い方だと競争になるんですけども、身分を保証してテニユアを与えるのは、トップの人材でなければならぬ。一流や三流の

その積み重ねでノウハウをつくっていくわけです。これはすごく大事なことで、日本も当然そうやるべきだし、やらないうと一流を保てない。

でもそうなつてくると、今回の法人化はいい影響を起しますよ。ファカルティ・メンバーの採用も、学生の採用もそうですが、個々の大学がエネルギーとおカネをかけて人を探るようになる。

それからもう一つ言うと、「21世紀COEプログラム」も、いろいろな曲折を経てスタートしましたが、大学の個性化には役立つんじゃないかと期待しているんです。私立はすでに宣伝に使っていますね。神奈川大学なんて新聞の一面広告を出したりしている。

そこまでののがいいことか悪いことかはまた判断しかねるけど、大学のトップがCOEを使って個性化を図り、その分野でピークをつくるように使ってくれば、アメリカ的ないい循環が起るのではないかと考えているんです。

すべての大学を私大にせよ？

橋爪 法人化は、大学の自主性、自助努力、経営努力を今まで以上に促進するという意味ではいいんでしょうけれど、残念に思うのは、せっかくなら、なぜ国立大学をすべて私立大学にしなければならぬということなんです。そのほうがもつとよかったです。

なぜかと言うと、国立大学行政法人は、独立法人とはいえず、やはり文部科学省が監督しているわけです。中期目標を出させて、中期計画でチェックして、同じ一つの役所が、

教授にそんな待遇を与える必要はまったくないので、そういう人はさっさと叩き出さなければいけないわけです。

しかし誰が一流かは、じつは非常に難しい問題で、一流の人でないと見分けがつかないところがあります。すると堂々めぐりになってしまいます。誰かが一流であるとまず決まれば、その一流の人から見ても一流の人と判定される、ということですから。よくありがちなのは、二流の人が二流の人を引っ張ってきたり、三流の人が三流の人を引っ張ってきたりするということです。それを防ぐためのシステムが、大学には必要です。教会が教皇を選んだり、宗教団体がリーダーを選んだりする場合の方法もたぶんそうだと思うんですけど、推薦書を書いたり投票したりして、一流、二流、三流の人びとを含む大勢が、結局一流の人を選び出す。そのための方法論というものがある。

これは、制度だけ真似してもダメなんです。大学で、自分たちは何をやりたいかという知識に対するリスペクトを、一流の人も二流の人も三流の人も分け持っていないと、制度が活きない。残念ながら日本ではそれが、アカデミズムの人々の中にさえ浸透していない。だから、あべこべに足をひっぱりあつてるように思えるんです。

生駒 アメリカはそこは徹底してますね。テニユアを取るのに最大のエネルギーとおカネを使って、候補を世界各国から大勢選ぶ。もちろんインタビューもするでしょう。複数の候補が挙がったら、決定した人と他の候補者との業績比較を追跡調査するそうです。それで、確かにあの時点でその先生を選んだのは正しかったということを確認する。

たくさん大学の大学を一度に管理します。管理する側にすれば、一つひとつの大学はどうでもよくて、平均としてまあまあならいいとしか考えない。

私立であれば、一つの大学を運営するのはその理事会。自分の大学しかないわけだから、それを絶対によくしようと思うわけです。個別の大学の経営と、横並びで多くの大学を一元的に管理するのでは、まるで違うのです。

もう一つ、国立大学と私立大学の区別が残れば、独立行政法人とは言っても、やはり国立大学が優遇される。私立大学はそこまでの優遇はされないでしょう。これでは競争の前提がまるで違うので、公正さに欠けます。いったん私立大学という同じ土俵に立って、その次に、複数のソースから複数のやり方で、競争的資金を分配する。COEも含めて、そういうかたちにできればなおよかったです。文部科学省が既得権益として、審査や研究費の配分の権限を温存しようとしているのですが、そういうものは必要ないと思うんです。

生駒 私はそれに関してはおちよつと意見が違って、視点を少し変えると、理工系の大学の研究・教育には非常にカネがかかるわけです。それで国の戦略として、国の競争力、国力の増強としての人材育成という観点から、国が高等教育、研究を含めて税金から大学の教育研究にいくら出すべきか——この議論がまずあるべきだと思います。それを考えると、私立化ということをやった途端に、国の高等教育予算を減らそうという動きが出ます。それは私立大学の首をも締めることになる。

だから、まず、高等教育を国の戦略として位置づけて、GDPの何パーセントと予算を決めて、それから分配方法を考えるという順序を踏まない。

また、私立も国立も平等におカネを配るべきであるというのはそのとおりだけど、それじゃ「なぜ私立大学を今経営しているんですか？」と僕は私立大学の経営者に聞いてみたい。昔は篤志家が自分のおカネを出して私立大学を始めて、国とは独立して自分の教育思想から興したわけですから、むしろ彼らは国のおカネをもらうことを潔く思わなかった。ところが今や私立大学が、国のお金を欲しいという。イコール・フッティングにしろという。じゃあ予算をどう分配すればいいの。僕の考えでは、研究費は国立／私立の区別なく優秀な研究者に分配すべきだと思いますけど、教育費に関しては、私大が国のおカネを頼るとしたら、「なぜ私大のですか？」と私大の存在意義を失いかねない。

そこは明確に区別して、国がある一定の大学を国費で運営して、国民に対して教育機会を与えることは必要だと思っんですね。今でも法人化後に予算を二割減らすとか言っているわけでしょう。だから僕としては、大学基本法をつくってこれと言っているんです。大学基本法というのは非常に簡単なもので、大学の使命を規定して、国が私立を含めて大学に対してある程度の財政負担をしますと規定する。科学技術基本法と同じように、例えば五年計画で、その間、国はGDPの何パーセントを負担しますと決めたらうで、分配の仕方を検討する。その

とき私立大学に分配するとしても、「なぜおたくは私立で運営しているのですか？」と、理事長によく聞いたうえで分配する。

橋爪 いや、私立大学に「なぜ私立なのか」と聞くのはなくて、国立大学に「なぜ国立なのか」と聞くべきだと私は思っんですね。なぜなら、大学は国よりも古いんだから、最初はその大学も私立大学だったはずなんです。

生駒 でも日本は違うよ。日本の大学のスタートは国だからね。

橋爪 そこが問題なんです。いまやこの時代に、国立大学である必要はないだろう。研究費は国が分配するとしても、研究プロジェクトごとにすぐれたものに与えればいいので、国立大学だからと与える必要はないんじゃないかと思っます。

同じように、教育に関しても、これからは国立大学に、運営費交付金といって、教員の人件費やなにかの経費を配ることになっている。私立大学には配らないんですけれど、そうではなくて、優秀な学生に奨学金というかたちで配って、それを大学が学費として回収する。そうすれば、運営費交付金と同じ額ですむ。そのうえ、優秀な学生を集めれば集めただけ、その学校に経費が集まることになるから、自然なかたちの競争が起こる。教育の点でも、国立も私立も関係なく、対等な競争が起こったほうがいいはずなんです。今は、私学の授業料が高く国立の授業料が安いので、優秀な学生は、私立大学がいくら努力しても、どうしても国立大学に集まりやすい構造があつて、不健康だと思っん



ですね。

生駒 でもその差は少なくなってきたでしょう。一番金持ちは東大に来るぐらいだから。

橋爪 そうですよ。差が詰まった理由は、国立大学が学費を値上げしたのと、受験勉強に費用がかかるからなんですけれど、それにしても私立大学はギリギリの経営でやっているわけです。国立大学はやはりたいへん無駄が多い。学費がコストの総額に占める割合は、私立では八〇パーセントなんていう大学はざらですが、国立大学は二〇パーセントぐらいまでです。

生駒 私立か国立かということ、経費がどこで賄われているかということはクリアにしたうえで議論が必要なんです。私立大学化しろと言った途端に国の予算が減らされる

ということを大学人は考えるべきで、そうすると私立だつて影響を受けるわけだから。それから、国の予算はある一定度、例えばGDPの一・五パーセントというふうに規定しておいたうえで、どう分配するのが最も有効なのか、国民に対して理解を得るべきです。

橋爪 そのとおりです。一番大事なのは、国が研究の基本的な経費を負担するということで、そのためにも、国立大学という存在を温存するのは不幸なことだと思います。それよりも、私立大学になって、対等に競争するというやり方の方が、長期的に見ていいのではないかと。

生駒 そういうことを言うものは、すごく危険なのは、やっぱり予算を減らされることだよ。

橋爪 その心配はわかりますが、それは問題として、別

いこま・としあき——1941年生まれ。東京大学工学部電子工学科卒業。工学博士。東京大学教授を経て日本テキサス・インスツルメンツに入社、社長、会長を歴任。現在、日立金属株式会社取締役。一橋大学国際企業戦略研究科客員教授。東京大学名誉教授。